

2019年度 研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは院生によるコース紹介と個別相談を実施した。

<実施概要>

◆日時：2019年5月22日（水）17:30-18:45

◆会場：教育学部棟 109

<コース紹介>

渡邊晃一朗（図書館情報学研究室）

楊映雪（社会教育学・生涯学習論研究室）

ワンデーセミナー記録

本年度も図書館情報学研究室と社会教育学研究室の研究交流を目的として、両研究室のOB/OGが研究内容を発表した。

<実施概要>

◆日時：2019年9月17日（火）10:00-17:00

◆会場：教育学部棟 158

◆発表者：浅石卓真，関直規，佐藤智子，村山遼

講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅰ】担当：教授・牧野 篤

本ゼミは、社会教育・生涯学習を研究するにあたっての基本的な視点の形成を目指すものである。ゼミの前半では、社会に開かれた教育課程を基礎とした学校改革や社会教育施設の所管の一般行政への移管を認める特例といった、近年の教育政策の流れとその背景について、2015年以降の中央教育審議会の答申等を参照することで、理解を深めた。ゼミの後半では、担当教員である牧野篤の著書『公民館はどう語られてきたのか 一小さな社会をたくさんつくるⅠ』（東京大学出版会、2018）をテキストとし、受講生が各自用意したコメントを発表する形式で議論を進めた。本書が提起する公民館論の枠組みとその限界、すなわち個体主義的な国民観に基づく階級論的・生産論的還元とそれによる公民館の日常性から

の乖離といった点に関する理解と検討が、ゼミでの中心的な課題となった。また、本書の検討に際しては、受講生各自の研究関心からも議論を深めることが目指された。

【生涯学習論特殊研究Ⅰ】担当：准教授・李 正連

本ゼミでは、国際比較の視点から、地域自治組織の現状と課題について検討した。

具体的には、以下の3冊をテキストに、担当者と受講生がそれぞれ事前に用意したコメントをもとに議論を進めた。①TOAFAEC（2019）「東アジア社会教育研究」no. 24、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会、②中田実（2017）「新版 地域分権時代の町内会・自治会」自治体研究社、③韓国住民運動教育院（2018）「地域アクションのちから—コミュニティワークリフレクションブック」全国コミュニティライフサポートセンター。

まず、①のテキストでは、中国、韓国、台湾、日本の社会教育法制と実践を概観し、東アジア圏や国際比較という視点から社会教育の課題を議論した。その後、②と③のテキストを教材に、地域自治組織に関わる制度と現在地域自治組織が直面している課題を理解し、これからの地域自治組織のあり方を、受講者自身の研究や生活へと視野を広げながら活発に議論を交わした。また、最終日に板橋区の社会教育専門職の方をゲストスピーカーとして招き、授業内の議論を、東京の社会教育実践という文脈から深めることができた。

【生涯学習論特殊研究Ⅱ】担当：非常勤講師・安藤 聡彦

本講義は、埼玉大学教育学部の安藤聡彦教授を講師に招き、4日間の集中講義として実施された。講義のテーマは「都市の社会教育学」であり、神奈川県川崎市をフィールドとして様々な観点からアプローチがなされた。

初日と2日目は、都市における社会教育の課題と川崎市の概況についての講義がなされた。初日は、講師により「都市の社会教育」の枠組みが説明された。まず近年の社会教育をめぐる動きが紹介され、戦後の社会教育の蓄積を検証する必要があること、そして、検証の視点に「都市」が挙げられることが説明された。2日目は、夏井美幸氏（川崎市教育委員会）による川崎の社会教育行政の歴史についての

報告、金命貞氏（首都大学東京）による川崎のコリアン・コミュニティの報告、安藤教授による川崎の公害史の報告がなされた。3日目は、実際に川崎市でのフィールドワークがおこなわれた。訪問先は2日目の報告内容と対応しており、川崎市教育文化会館、川崎市ふれあい館、川崎公害病患者と家族の会事務所においてそれぞれ活動内容の説明や質疑応答がおこなわれた。

最終日は、これまで学んできた川崎の社会教育実践を踏まえたうえで、受講生各自が「都市の社会教育学の課題」について報告し、活発な意見交換がおこなわれた。

なお、本講義は埼玉大学等の大学院生も参加して進められた。図らずも院生相互の交流の場に恵まれたことは、受講生にとって貴重な機会であったと同時に、たいへん刺激になったことを付け加える。

【生涯学習研究における理論と方法】担当：非常勤講師・佐藤 智子

本授業は、生涯学習を研究する上で基本となる学習の諸理論、特にジョン・デューイの教育理論に関する文献のクリティカル・リーディングを通して受講生と講師で議論する形で行われた。デューイの著書のうち、『子どもとカリキュラム』（1902）、『学校と社会』（1915）、『民主主義と教育』（1916）、『経験と教育』（1938）などを講読し、毎週受講生全員が前回授業のリフレクションと文献内容に対する論点を抽出したレジュメを基盤として議論を進めた。受講生は各自の研究関心に沿った理論的レビューおよび論点整理を行い、自ら問いを立てて論証していく研究の基本的な過程を繰り返し行った。デューイが考えていた「学習」「民主主義」「学校」「経験」とは何かについて批判的レビューを行い、受講生の個人研究につながる考察を深めることができた。最後には本授業を通して得た理論的考察をまとめ、本コース紀要の授業記録（資料）として投稿した。

【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田 節之（本年度、本コースからの受講者なし）

本授業では、様々な実践・介入活動をプログラムとして客観的に捉え、その結果や効果を評価し、活動の質向上につなげるための方法論を学ぶ。プログラムの価値は、経済的指標などで捉えることが困難な個人や集団に対する教育的・心理的效果として現

れることが多いため、社会調査・実験心理学・心理測定といった方法論との親和性が高い。本授業では、プログラムを客観化・可視化する手順をまず習得したうえで、具体例を通してプログラムを実証的に評価するための方法を学ぶ。

【生涯学習論文指導】担当：教授・牧野 篤，准教授・李 正連，新藤 浩伸

本ゼミは、研究室に所属する大学院生が各自の研究を報告し議論する場として開講されている。昨年度に引き続き、月に一度のペースで実施し、発表者2名が各々の研究状況を報告している。発表者にとっては、研究構想・研究計画や具体的な学位論文、各種紀要論文・学会誌論文の枠組みを精査する貴重な機会であり、またお互いの研究関心を知り、相互理解を深める機会にもなっている。本年度報告された研究テーマは、高齢男性の活動・学びの場に関する研究、環境教育の理念的枠組みを再考する研究、戦後生活記録実践の意義を問う研究、公共ホールづくりへの地域住民の関わりを捉える研究など、多岐にわたる。それぞれの報告に対し、「ケア」「社会参加」といった用語をどのように定義し論を構成するか、また実践現場に入る際の研究者の立場性、研究者自身の関心のルーツなど、研究の手続き・研究者に求められる基本的な姿勢に関して、示唆的な議論が多く行われた。

【図書館情報学総合研究】担当：教授・影浦 峽

【図書館情報学論文指導】担当：教授・影浦 峽，准教授・河村俊太郎，客員教授・海野 敏

通称「総合ゼミ」と呼ばれる本講義は、主に図書館情報学研究室所属大学院生が研究発表をする場です。基本的に隔週で開催され、毎回2名が研究進捗報告あるいは学会発表練習を行います。発表者は影浦峽教授、河村俊太郎准教授、客員教授の海野敏氏、客員研究員の賀沢秀人氏および他の院生から質問と助言を受け、参加者全員が研究方法と内容について相互理解を深めます。発表者のテーマは知識を構成する言語表現、発達性ディスレクシアとフォント、言語運用の適性、ハイパーテキスト・ドキュメントのデザイン、数学的表現としての用語体系、一切経音義の文字情報、翻訳コンピテンス、外部資料の引用・参照、母語話者の言語運用、大学図書館のサブジェクトライブラリアンと図書館員の専門性、ロシ

ア語の統語構造、公共劇場と多岐にわたります。また例年通り、最後のゼミで修論検討会が開催されました。

【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦 峽

本講義では受講者は各研究テーマに応じ技術系・対人系・記述系のグループに分かれ、各々に応じた内容の講義が展開された。技術系グループでは主に自然言語処理の最先端の動向を押さえることを目的に、ACLに代表されるトップカンファレンスに投稿されている論文の紹介を行った。今学期は注意機構など、研究対象が限定されない論文のレビューが主であった。対人系グループは対人実験などを扱うグループであり、今学期で竹内理・水本篤著『外国語教育研究ハンドブック』を講読し、発表と議論を併用する形で量的研究に関する統計的方法の習得に取り組んだ。第一部と第二部を扱い、量的研究の基礎知識を身に付け、t検定、分散分析入門に関するソフトの出力や提示方法など必要な知識を習得した。記述系グループでは、M. フーコー著『知の考古学』を輪読し、言語表現の様態について分析し記述するとはいかなることかを学習した。また、同系列のキーワードを書き出して、系列ごとに違いを意識して読む等、本の読み方についても学習した。

【情報媒体構造論】担当：教授・影浦 峽

本講義では受講者は各研究テーマに応じ技術系・対人系・記述系のグループに分かれ、各々に応じた内容の講義が展開された。技術系では主に自然言語処理の最先端の動向を押さえることを目的に、ACLに代表されるトップカンファレンスに投稿されている論文の紹介を行った。今学期はヘイトスピーチ検出や Wikipedia におけるトピック分類を活用した WSD など、研究対象に特化した論文のレビューが主であった。対人系グループでは竹内理・水本篤著『外国語教育研究ハンドブック』の講読を継続し、第三部と第四部の量的研究の発展と質的研究の基礎と展開について学習した。量的研究の発展について、因子分析や多変量解析などの方法を巡って、基礎知識や統計ソフトの出力、提示方法を学習した。また、第四部で質的研究の概念を理解し、色々な質的研究の方法を習得した。方法論ゼミ・記述系グループでは、フーコー『知の考古学』の講読を行った。後期は特に第 III 章第 IV 節「言表とアルシーヴ」を中心

に、ポジティヴィテ、歴史的アプリアリ、アルシーヴなどフーコーの言説分析における語彙の定義から出発し、第 IV 章に進みフーコーの考古学が果たすべき役割と思想史の区別について学習した。

【図書館情報学理論研究】担当：准教授・河村 俊太郎

本授業では Alex Csiszar 著 *The Scientific Journal-Authorship and the Politics of Knowledge in the Nineteenth Century* (2018) をテキストに、受講生が事前に用意した翻訳とコメントを発表し、各自の研究関心とも関わらせながら議論が進められた。輪読を通じて、英語文献の読み方、そして public などの基本的な概念や科学雑誌の歴史について検討した。具体的に、19 世紀において雑誌の影響力和科学事業の正当性という二つの問題をリサーチクエスションとして、科学の権威は雑誌の著者と読書を巡ってどのように再構成されているのかについて講義が行われた。授業期間で本書の第一章と第二章を読み終え、近代初期の学協会で発展した判断のフォーマット、ジャンル、体制の意味、そして体制が科学雑誌の出現とどのように結びついていたのかについて検討した。また、隠岐さや香の著書『科学アカデミーと「有用な科学」—フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』(2011)を参考にした上で、授業が多様な視点で展開された。

【図書館と情報資料】担当：客員教授・海野 敏

図書館と情報資料に関連するデータを収集し、それらを数量的に分析することによって知識の展開・記録・伝達・流通についての新たな知識を得ることを目的とする。今期は主に統計解析の基礎、各書誌データの構造、基礎的なテキスト処理、ウェブスクレイピングの手法を学び、演習を通じて R 言語の基本的な操作を身に付けた。

書誌データ、特定主題の文献コレクションの全文データ、特定テーマに言及したテキストデータを用いて演習を行った。演習ではスクレイピングのための HP アドレスの分析、収集したデータの構造の解読と必要なデータの抽出、データの整形(クリーニング)に重点が置かれ、数量的な分析の前に必要とされる作業の重要性を学んだ。また、具体的にデータを分析することで、図書館と情報資料に関連するデータの特徴について学習した。最終回の学生による最終課題の発表では、映画のレビュー分析や小説

の著者判定などバラエティに富む発表が行われた。

【デジタルドキュメント論】担当：非常勤講師・阿辺川 武

本講義では、デジタルメディア上で配信・流通・利用・保存される情報を「デジタルドキュメント」と定義し、デジタルドキュメントを対象とする研究やデジタルドキュメントを利用する研究を行う際に有用な知識と技術を学んだ。具体的には、学術論文 PDF 解析、学術論文のサイテーションマイニング、書誌データの集計と可視化、小説のテキストマイニング、ニュース記事のクラスタリング、Wikipedia からの情報抽出、フォントとユニコード、ビジネス文書の集計と可視化、インターネット・アーカイブの利用、文書スキャン画像からの情報抽出といった多様なタスクについて演習を組み合わせた講義が展開された。演習部分において UNIX コマンドと Python スクリプトを利用して実際に操作を行うことで、デジタルドキュメントを処理する基本的な方法を身に付けることができた。最終課題では、本講義で学んだことを応用して受講者自身の研究に関係のある処理を行い、レポートを執筆した。

個人研究活動報告

(図書館情報学研究室 博士課程)

[新井 庭子]

本年度は、主に前年度に出した結果を発展させ、その結果を IARTEM (デンマーク, 9 月) において報告した。知識を構成するものとは何であり、またどのようにそれが構成されるのかという問いは、主に図書館情報学において問われてきた。それとは別に、知識がどのようにして受け取られるかという問題もあり、これは教育学や認知科学などで様々な形で検討されてきた。本研究の分析の背景にある問題はこの 2 つの問いに深く関係している。すなわち、体系的な知識を構成する言語表現上の特徴とは何であり、そして、それらは知識を伝えるという現実の要請を前提としたときに、それに応じてどのように変化するだろうか。これらの問いを念頭に置き、知識を構成する言語表現の特徴について、小学校 5~6 年生と中学校 1~2 年生の理科教科書を調べた。

[朱 心茹]

昨年度に引き続き、博士論文執筆へ向けて研究を行いました。本年度は主に昨年度に完了した書体評価実験の分析と和文書体カスタマイズシステムの開発に取り組みました。書体という形を対象とする研究における再現性のある手法の確立と読みやすさ研究の客観的評価の分析手法の模索を進めました。

2019 年 9 月に International Association of Societies of Design Research Conference にてこれまでの成果を発表しました。11 月には「発達性ディスレクシアに特化した読みやすい和文書体の研究」と題した論文を『DNP 文化振興財団学術研究助成紀要』にて発表しました。

株式会社モリサワとの共同研究として進めていた研究をまとめた論文が「教科書体付属欧文の読みやすさに関する実証研究」(影浦教授・高田氏との共著)という題目で『デザイン学研究』に採択されました。また、影浦教授と NII の佐藤教授との共同研究として取り組んでいるニューラルネットワークを応用した書体分析研究の最初の成果を IAPR International Workshop on Document Analysis Systems に投稿しました。

[唐 麟源]

今年度は昨年度に引き続き言語の規範的使用に関する研究を行いました。

規範的な言語運用例として法律用語を研究対象に絞り、それらの用語と自然言語処理における意味計算の手法である分散の意味表現学習との理論的親和性について調査しました。その成果について、6 月にモントリオール(カナダ)で“An Examination of the Validity of General Word Embedding Models for Processing Japanese Legal Texts”というタイトルで ASAIL2019 にて口頭発表をしました。12 月にマドリード(スペイン)で“Verifying Meaning Equivalence in Bilingual International Treaties”というタイトルで JURIX2019 にて口頭発表をしました。

そのほかに、博士研究と並行して「翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築」の基盤研究に研究員として参加しています。

[韓 尚珉]

昨年度に行った自治体ウェブ文書についてのドキ

コメント・デザイン分析の結果を整理した後、現在ウェブ上で実際に使われている自治体の手続きを記述した文書のうち、重要要因を考慮して選定したウェブ文書を用いて読み手の読みのプロセス及び理解に及ぼす文書デザインの影響をアイトラッキング手法で観察する探索的実証研究を行った。視線データ及びタスク遂行度と内容理解度の分析に基づき、様々な文書デザイン要素のうち非母語話者の日本語ウェブ文書読みに関連が大きい要因を洗い出すための二次実験を実施する予定である。

自治体ウェブ文書に対する日本語非母語話者の情報取得タスクに関する実証研究の設計及び分析の枠については、10月に京都で開催された第67回日本図書館情報学会研究大会で口頭発表を行った。また研究室関係者と共同研究を行い、朱心茹氏と非母語話者のウェブ文書読みに対する書体の影響について検討し、翻訳文を自己修正する際のメタ言語利用に関する朴恵氏との研究成果はICTEで発表された。

〔陳 龍輝〕

We proposed a cross-lingual terminology model to map the terms with each other based on techniques of Graph Convolutional Networks (GCNs). With our efforts we are able to propose a method that enhance terminological processing by in theory providing terminologists and domain experts a list that allow the reduction of efforts in standardization. We propose an encoding of the structural property of terms by aligning their embeddings using graph convolutional networks trained from terminologies in separate languages. Our results show that taking into account the structural nature of terminologies contributes to the improved results, and the methods can augment the standard bilingual lexicon induction methods. We also report results in the MT Summit and the AsiaLex 2019 conference on our efforts to quantify the necessity of terminological structure in translation.

〔王 一凡〕

慧琳撰一切経音義・希麟撰統一切経音義にみられる異体字の文字情報分析を行っています。1月に日本Googleを訪問、2月にSATプロジェクトのシンポジウムで研究発表を行い、その内容を元に原稿を執筆し、12月に『デジタル学術空間の作り方』として出版されました(第10章担当)。また、3月にケン

ブリッジ大学で行われた書記言語研究の学会AWLL12に参加しました。8月に歴史民俗博物館主催の開発合宿に参加し文字照合アルゴリズムの実装などを試み、その関連で12月の「じんもんこん2019」企画セッションで発表を行いました。研究室では5月のオープンラボ・9月のワンデーセミナーの運営を行いました。外部活動では5月に昨年の/grafematik/の発表を元に*Graphemics in the 21st Century*に寄稿(p.91-109)、7月にSATの関連で中国の電子図書館CADALに関する記事を『中国21』に寄稿(近刊)、12月に日本漢字学会大会に出席。また引き続きUCS規格の策定会議に年2回参加しています。

〔朴 恵〕

本年度は研究テーマを「メタ言語利用を通しての翻訳者コンピテンス養成」に絞り、翻訳者が翻訳ワークフローにおいて主に関わっている「翻訳」と「修正」プロセスに着目し、メタ言語利用効果測定の実証実験を進めてきた。そのうち、自己修正実験を前期で実施し、分析結果を8月に中国深センで開催される2019 International Conference on Translation Education、9月に日本通訳翻訳学会の年次大会で口頭発表した。相互修正実験を後期で実施し、来年度に国際学会で発表できるよう現在結果分析に励んでいる。

また、科研費プロジェクト、日本通訳翻訳学会研究プロジェクトに参加させていただき、名倉早都季氏とのグループ研究が教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターの若手研究者育成プロジェクトに採択され、多方面から刺激を受けることができ、最高の研究環境に恵まれていた。

ほかに、6月にリュブリャナ大学で開催されるサマースクールDOTSSに参加し、翻訳研究に関する集中講義を受け、研究助言をたくさんいただいた。ヘルシンキ大学のKaisla Kajava氏、Emily Öhman氏との共同研究“Emotion Preservation in Translation: Evaluating Datasets for Annotation”がDigital Humanities in the Nordic Countries 2020に採択された。

〔図書館情報学研究室 修士課程〕

〔名倉 早都季〕

国語教育における言葉を使って考えることに関する「説明」についての研究を進め、修士論文としてまとめた。

「説明ができるとは何か」という問題関心に基づき、一般に説明であるとされる言語表現に求められる性質およびそれを生成する過程で求められる操作を明らかにした。国語科の大学入試問題における理由設問を対象に、説明に用いることが求められる「形式」(モドゥス・ポネンス等)と、「言語表現の性質」(何を表現する語彙か等)を分析した。

修士論文の研究結果は、2020年2月ストックホルムでの国際シンポジウムで発表する他、2020年3月に水戸で開催される言語処理学会年次大会で口頭発表を行う予定である。また論文の一部を「図書館情報学」に投稿予定である。その他、国語科教育分野での論理的思考をめぐる記述についてのレビュー(“国語科教育における論理的思考 一体系性と具体性についての整理一”『教育学研究科紀要』vol. 59, 2019)を投稿した。

[姚 依辰]

今年度は修士論文の作成に専念しました。研究の内容としては、去年の第二言語習得における非母語話者の「不完全性」から出発し、果たして英語の「能力」とはどのようなことを指すかについて模索します。そのために英語の修辞(比喩、メタファー、イデオムなどのフレーズ)の使用を取り上げ、それを理解する能力を言語能力の一部として、英語母語話者と非母語話者の相異を関連性理論の角度から考察しました。

具体的な活動においては、2019年度前期まではパイロット実験などを通し調査内容のデザインを推敲しました。10月からは東京大学研究倫理審査において許可を獲得し、本実験を開始し、1ヶ月をかけ、各国のバックグラウンドを持つ英語の母語話者10名、非母語話者13名を本郷キャンパス内で募集することができました。英語の書きテスト、修辞に関する書き解答、及び解答に関する半構造化インタビュー三つの部分で行いました。修士論文では、実験の内容を踏まえ、現代英語の多様性という視点から英語能力と「母語性(ネイティブネス)」の関係について論じました。

[渡邊 晃一朗]

今年度は修士論文執筆に取り組んだ。修士論文では引用をテーマにし、それがどのような概念に対して行われてきたのかの記述と、それに基づく引用の

有無に関係する要素の分析を行った。これらの研究成果は来年度、雑誌論文として投稿する予定である。また、昨年度に引き続き、理化学研究所革新知能統合研究センター 言語情報アクセス技術チームでの研究パートタイマーも継続しており、チームリーダーの関根聡氏の助言を受けつつ、研究を行っている。本年の研究はこれまでの機械学習を活用した研究とは異なり、人手によるアノテーションを中心とした研究であった。そのため、機能文法など他分野の知見を活用した。アノテーションにおいてはアルバイトによるアノテーションを行い、マニュアルの作成なども行った。

(社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程)

[大山 宏]

本年度は昨年度から継続して青年の自立に関する研究を進め、日本社会教育学会紀要『社会教育学研究』第56巻に「都市青年にとっての「社会参加」とは何か—1960年代から70年代の横浜市における青年サークルの取り組みから—」として投稿した(現在査読結果待ち)。また、以前社会教育の現場に勤務していた際のつながりから、東京都板橋区の社会教育の実践の歴史的検討を齋藤真哉・佐治真由子と共同で行い、日本社会教育学会第66回大会にて「都市化社会における社会教育施設の成立過程—東京都板橋区を事例に」として発表した他、日本公民館学会年報16号に「大都市における市民の学びと社会教育施設の転換—東京都板橋区を事例に」として投稿し、掲載された。この他、昨年度若者支援の実践家であるユースワーカーと共にスウェーデンの若者支援の現場視察を行った際の報告書として「スウェーデンのユースワークをたずねるたびに：スタディツアー報告書」を、視察に参加したメンバーと共同で執筆し、Kindleより出版されている。

[中川 友理絵]

今年度も、昨年度からの問題意識を引き継ぎ、教育活動や学習支援を担う博物館学芸員の役割、専門性に関する研究をおこなった。1970年代以降の学芸員の専門性に関する資料を収集し、並行して、社会教育職員や公民館職員の専門性に関する研究を参照した。その上で、学芸員の専門的な力量の形成過程について、人びととの関わりという観点から、学芸

員間および学芸員と市民との連携のなかでの力量形成の在りようを検討した。

共同研究として、昨年度より継続していた、高等教育機関における地域貢献の取り組みやその評価についての研究をまとめ、日本社会教育学会第66回研究大会にてその成果を報告した(荻野亮吾・中川友理絵「地域での学習の組織化に関する高等教育機関の取り組みの現状と課題」)。この報告をもとに、論文執筆に向けた作業をおこなった。

〔松田 弥花〕

本年度は主に、勤務先である高知大学における教育活動や高知県内でのアウトリーチ活動に加え、自身の研究課題である「スウェーデンにおける Social Pedagogy」について海外調査を行いつつ博士論文の執筆を進めた。高知県では、自治体や学校、学童保育、青年団との連携を通じ、地域課題や教育課題について知見を深めた。他方、博士論文の一部となる論文(“スウェーデンの基礎学校における Social Pedagogue 配置の意義 —「インクルーシブ」の観点から—”『高知大学教育学部紀要』 vol. 80, 2020 (2020年3月末刊行予定))を投稿し、その他の部分も執筆中である。その他の研究活動として、図書(北村友人・佐藤真久・佐藤学編著『SDGs時代の教育:すべての人に質の高い学びの機会を』学文社, 2019, p. 190-200)の一章を執筆担当する機会を頂いた。

〔須藤 誠〕

昨年度より休学し、首都圏内の自治体で社会教育指導員(非常勤職員)として勤務し社会教育実務経験を重ねている。夏から秋にかけての多忙と体調不良が相俟って博士研究の進捗は乏しいものの、後期博士課程進学時からの課題意識を引き継ぎ、これまでの教育実践(ことに社会教育実践)において人々に生起するところの時間意識がいかに措定されてきたのか、そしてそれが今日いかに変容しうることなのか、という原理論的な問いに対して、「時間」「身体」や「空間」といった諸概念の検討をしながら応えようと試みた。その結果として析出された複数の論点については、これまでに各所で発表してきた内容を肉付けしつつ、来年度以降積極的に発表する所存である。

なお、休学以前より他領域の院生とともに継続してきた共同研究の結果が、海外ジャーナルに掲載さ

れた(Chie Fukui, Mahiro Fujisaki-Sueda-Sakai, Nobutada Yokouchi, Yuka Sumikawa, Fumika Horinuki, Ayako Baba, Makoto Suto, Hiroko Okada, Ryogo Ogino, Hyosook Park, Junichiro Okata, “Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés” *Ageing Clinical and Experimental Research*, vol. 31, 2019, p. 506-515)。

〔入江 優子〕

本年度も引き続き「『経済的に困難な家庭状況にある児童生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト(東京学芸大学)」に携わりながら研究を進め、その成果として2020年3月刊行予定の著書(分担執筆)『子どもの貧困とチームアプローチ〜“見えない”“見えにくい”を乗り越えるために』を取りまとめ中です。また、博士論文執筆に向けて調査フィールドを沖縄に移し研究を進めました。関連の研究活動報告は以下のとおりです。

【学会発表】

・「生活困難を抱える家庭の子供を取り巻く沖縄の地域社会の構造 —自治的集落と公的支援の関係性に着目して」第66回日本社会教育学会自由研究発表, 2019年9月14日

・「子どもたちの多様性を生かすコミュニティ・スクールづくり」日本教育心理学会総会第61回自主企画シンポジウム「多様なニーズを持つ子どもたちを支える学校づくり」話題提供, 2019年9月14日

〔詹 瞻〕

本年度における主な個人研究は下記の通りである。

① 博士論文のテーマは、中国における美術館教育の理論とその歴史の展開についてである。その後博士論文執筆のため、今年一年間休学して、中国の蘇州博物館、上海当代芸術博物館、嘉興荻原美術館において、中国現代博物館の教育活動の理論と現状について現場調査を行っている。これをベースにして、次の二点に焦点を当て、投稿論文を執筆している。一つ目は、2000年以後博物館教育が国民教育体系に取り入れられて以来の学校連携との新たな展開、二つ目は、公立美術館と私立美術館における教育活動の比較研究である。

② 日本の地域に根差した博物館教育・ボランティア養成・自主的学習方法などを視野に入れた研究を進め、「日本社区艺术博物馆教育普及活动」という題

名で中国上海市楊浦区第四回未成年思想道德建設国際シンポジウムで発表した『第四届未成人思想道德建設国際論討会資料汇编』2019年12月,p.24-29)。

③ 北京で開催された2019年東アジア生涯学習フォーラム(2019年11月)で、牧野先生に同行し、通訳活動に取り組んだ。

〔堀本 暁洋〕

引き続き、公共ホールと地域住民の関わりに関心を持ち、中でも公共ホールの整備過程に着目して、施設の持つ学習の機能について研究を行っている。本年度は、川崎市の市民館にホールを求めた地域住民の活動を対象にした調査を行い、その内容を日本社会教育学会第66回研究大会(早稲田大学)にて発表した。また、昨年度に取り組んだ、親子劇場運動による公共ホール建設運動についての研究内容を、本研究科紀要に投稿した。

また、東京都文京区のNPO法人「街ing本郷」の定例カフェへの参加と広報誌の執筆、千葉県柏市高柳地区でのキッズセミナーにて楽器作り講座の講師担当、長野県松本市との共同研究などを行った。そのほか、地域文化研究会に参加し、地域の文化活動実践、社会教育研究者について、研究を深めた。

2019年6月1日・2日に行われた日本社会教育学会六月集會では、会場校事務の作業を先生方、院生の皆さんとともにに行った。

〔松尾 有美〕

9月に行われた社会教育学会での発表では、地域の中での母親の居場所としての「お母さん食堂」を題材に自由研究発表を行ったが、研究対象とした現場についての位置づけや、自身の課題意識のストーリーなどについてまだまだ考える余地がたくさん残った発表となった。このような課題を受けて秋以降は、そもそもの研究対象としてこれまで研究してきた「共同育児」について、実践としての活動の始まりからこれまでの歴史的な変遷を紐解き理解することを主に行ってきた。来年度、日本保育学会または社会教育学会への論文の投稿を予定している。

また昨年度から関わらせて頂いている研究室と松本市との共同研究は2年目を迎え、地域住民とのワークショップや話し合いを通して、毎回様々な気付きを得ている。これまで大学・大学院で学んできた学問としての社会教育と実践現場での動きのある社

会教育との間のギャップをいかに乗り越え、自分の思いをどう伝えていくか、来年度は3年目且つ最終年度になるので、引き続き先生方や関わっている院生と考えていきたい。東アジア社会教育研究会(TOAFAC)の活動にも韓国フォーラムの一員として参加し、韓国平生教育の一年動向を分担執筆する機会をいただいた。こういった研究会や学会活動をしていく中で翻訳・通訳をする機会も有り難いことにいただくことができた。

〔大野 公寛〕

引き続き「学校と地域の関係」をテーマに研究を進めている。今年度は、いくつかの事例研究及び1990年代後半からの「開かれた学校づくり」の検討を通して、学校と地域の関係を捉える一つの視点、すなわち学校の外部としての役割を期待された地域自身が学校との関係において従来の構造を支え得るという権力論の観点を導出した。その内容は、2019年9月に行われた日本社会教育学会第66回研究大会及び10月に行われた日本教育行政学会第54回大会で報告するとともに、本研究科紀要に論文として投稿した。今後は、戦後日本の学校と地域の関係史の検討をさらに進めると同時に、学校と地域の関係を具体的な学習論として捉える事例研究にも取り組んでいきたい。

その他、岐阜市教育委員会との共同研究、文京区のまちづくりNPO「街ing本郷」の定例会への参加や広報誌の作成などの活動にかかわった。また、全国公民館連合会の実施する全国公民館実態調査に参画した。

〔丹田 桂太〕

本年度6月より研究の拠点を福岡へ移した。本年度のはじめには、民主教育研究所『人間と教育』102号(2019年6月発行)にこれまでの研究の成果を整理し執筆する機会をいただいた。また、昨年度意識的に取り組んできた、戦後社会教育研究における「青年」概念の歴史的変遷について検討した論文を、本研究科紀要に投稿した。さらに本年度からは、これまで理論的な面に傾倒してきた研究を実態に即しながらより具体化していくために、地方出身者にとって重要な進学先である専修学校専門課程に注目し、各地の学校を訪れながら、教員や学生へのヒアリングを継続的に実施している。その成果の一部は、前

掲『人間と教育』第104号(2019年12月発行)および福岡・東アジア・地域共生研究所『地域共生研究』第7号(未刊行)にまとめている。

この他、本年度で3年目を迎える岐阜市教育委員会との共同研究など、研究室の大学院生とともにいくつかのプロジェクトに携わっている。それらの成果は、日本社会教育学会第66回大会(於早稲田大学)および日本教育行政学会第54回大会(於埼玉大学)で報告した。

〔末光 翔〕

引き続き、精神障害者家族の学習活動、および学習への参加を通じた家族の変容の過程について、「家族による家族学習会」プログラムを主要な事例として研究を進めている。本年度は、事例を捉える理論枠組み、調査手法の見直しを中心に行っている。第66回日本社会教育学会では、家族の主体形成論としての位置づけから上記事例の報告を行い、議論の整理を試みた。また、論文執筆を進めるにあたり、家族の共同の学習の場の特徴を捉える視点としてナラティブ・アプローチの議論を参照している。これらの視点を統合し、精神保健福祉領域に由来する事例をいかに社会教育の文脈に位置付けるか、目下の課題である。

その他、東京都国立市公民館との関わりに重点を置いている。昨年度11月より公民館運営審議会委員として、公民館運営に関する議論に参加している他、しょうがいしゃ青年教室の「障がいのある人と共にあること」を意識した実践に注目しており、自身の研究テーマとの関連付けを模索している。

〔林 忠賢〕

今年度は引き続き、芸術教育に関する研究を進めた。芸術教育プログラムは多様な形で現代社会課題に向けた解決の手法として展開されてきたが、それについての検証は未だ十分とは言えない状況である。特に他者との関わりである社会的転移効果に関する研究には課題が多く残されている。こうしたことに対して、先行研究を踏まえて「芸術教育プログラムの社会的転移効果についての考察及び可能性」をテーマにした報告を岐阜大学で行われた第58回大学美術教育学会で発表した。それと共に台湾のジャーナルである「芸術教育研究」に投稿する予定である。今後さらにフィールドに入り、検証していきたい。

また、東アジア社会教育研究会(TOAFAC)の活動にも一員として参加させてもらい、『東アジア社会教育研究』の24号に台湾における生涯学習のこの一年の動向について執筆し、そして論文の翻訳を取り組んだ。

〔野村 一貴〕

地域づくりと自然環境のかかわりについて関心を持ち、とりわけ歴史的な空間認識がどのように表現され、受け継がれていくのかについての研究をおこなっている。今年度のおもな調査先は、矢作川(愛知県・岐阜県・長野県)で進められている流域連携活動である。このほか、副専攻では総合文化研究科の「科学技術インタープリター養成プログラム」にも所属し、科学技術と地域社会の在り方についても実践を交えながら調査を続けている。

研究室に関わる活動としては、8月に柏市(高柳・豊四季)で実施されている「東大キッズセミナー」において全体調整を担当し、多世代交流の実際について知見を深めることができた。

これまでの研究業績等については個人ホームページ(<https://knomu.wordpress.com/>)に掲載しているので、そちらを参照されたい。

〔松本 奈々子〕

博士課程に進学しました。修士課程から引き続き、長野県飯田市「華齢なる音楽祭」に関わりながら、高齢化する地域における学びと高齢者を中心に組織される場の関係を大きなテーマに研究を進めています。

これまで老年学の先行研究を主に検討してきましたが、本年度は、ゼミの受講、成人教育の学習論や生涯教育論の基礎文献の講読を通して、関心・課題の整理を行いました。それを踏まえて、2019年9月の日本社会教育学会にて口頭発表を行いました。また、4月より「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」に参加しています。その他、引き続き文京区のまちづくりNPO「街ing本郷」の活動で、広報誌の作成に取り組んでいます。

〔鈴木 繁聡〕

本年度より博士課程に入学した。修士課程に引き続き、「学校と学習塾の関係」をテーマに教師を対象

とした質的研究を行っている。日本社会教育学会第66回研究大会では先行研究をまとめながら、社会教育の視点を取り入れることで学習塾研究の新たな展開の可能性について発表した。加えて、学校と学習塾の両方で教える教師へのインタビューを、質的データ分析手法である SCAT（大谷 2008, 2010, 2019）を用いて分析し、その結果を日本教育学会第78回大会で発表した。

この他には、岐阜県岐阜市教育委員会との共同研究に参加している。本実践の内容は報告書としてまとめ、発行した。また、本年度の教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターの若手研究者育成プロジェクトに採択された。「教師は『エビデンス』にどのような意味を付与しているのか？」をテーマに質的研究を行い、分析結果はワーキングペーパーとして2020年5月に刊行予定である。

〔金 亨善〕

本年度より博士課程に進学し研究の関心や課題設定に向けての活動を行った。日本の地域づくりや学校と地域の連携を大きなテーマとして長野県松本市・岐阜県岐阜市等での共同研究・実践に参加しながら、日本のPTAの歴史・現状から見た地域づくりにおけるPTAの役割や意義について個人研究を進めている。個人研究の課題意識については2019年10月に行われた第20回 ICER (International Conference on Education Research) で報告し、本年度は戦前から日本の地域社会に存在していた地域組織・保護者会等が戦後 GHQ・文部省によってPTAという新しい組織として学校と地域社会の中に入って行く過程の中でどういうふうに変容してきたのかについて、発足当時の関連資料や先行研究を中心に文献研究を進めている。

その他、昨年度に引き続き、東京都世田谷区の「岡さんのいえ TOMO」で月一回の「岡's キッチン」、TOAFAEC (東アジア社会教育研究会) の定例会に参加している。

〔三木 柚香〕

本年度より本研究室博士課程に進学した。環境教育学研究を専門とし、主に都市に住まう人々と自然のかかわりについて調査研究を進め、公害教育の再定位の議論から環境教育の理念的枠組みについて探求している。本年度は、社会教育・生涯学習では、

どのようなことが議論されているのかを注意深く観察するような1年となった。環境教育との隣接点の発見につながるようなアイディアに溢れた1年となったが、「人間が生きる」とは何かを問い続けることの果てしなさを感じる場面も多くあった。

しかし、具体的な研究活動としては、環境教育学会の実行委員を務めたり、韓国で行われた“International Conference of Culture, Biography & Life-long learning (ICCB2019)”での発表、『持続可能な社会のための教育事典』への連名執筆など多様な機会をいただいた1年でもあった。現場に足を運んだ機会が少なかった1年でもあったので、来年度は再び現地の方々に学びながら、環境教育研究の道を歩み深めたい。

(社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程)

〔楊 映雪〕

本年度は、修士論文「高齢者の社会参加とは何か—当事者の語りを通して—」の執筆に取り組んだ。社会参加という概念を高齢者自身による意味付けに着目し、今まで捉えられなかった社会参加像を描き出すことで、従来の「依存的で受動的な」存在から「主体的で能動的な」存在へ的高齢者の心理的な変化メカニズムを究明することを目的としたものである。

研究活動としては、昨年度に引き続き、長野県松本市との共同研究「自治住民を基盤とした社会システム構築事業」の調査及び同市鷹匠町で初開催の「子どもお泊り会」等の実践活動に参加し、報告書の共同執筆を行った。また、千葉県柏市高柳地区でのキッズセミナーの講座と「高柳ふる協まつり」にも引き続き関わらせていただいた。その他、高齢社会を背景に中国における社区教育の現状と課題に関する考察結果を第63回国際比較教育学会(CIES)で発表した。

〔酒井 瑞生〕

本年度は、修士論文「高齢期の学びと『孤独感』の変容—なかの生涯学習大学卒業生の語りから—」の執筆に取り組んだ。高齢者の「孤独感」に対する見方とその「孤独感」が地域活動を行う過程でどう変容したのかを考察し、個々の高齢者がそれぞれの生活空間において「主観的幸福感」を抱きながら活動し、積極的に生きようとする姿や新しい生き方を

提示することを試みた。一般的にさみしさを伴う感情として認識されうる「孤独感」や社会参加活動に関する理論研究を踏まえ、なかの生涯学習大学卒業生を対象とした事例調査による実証を行った。

〔岡本 知佳〕

1年間の休学期間を経て2019年度に修士課程に復学した。本年度は修士論文の執筆に主眼を置き、研究課題の再検討と質的データ分析を実施した。

大きな研究関心はこれまでと同様“戦後の民衆の学習文化活動”であるが、研究課題は変更した。すなわち、前年度までは学習文化活動の意義を主体形成と仮定した場合の主体像とは何かを明らかにすることが研究課題であったが、本年度は、学習文化活動のなかでも生活記録実践に着目し、生活を書く営みや生活記録文集そのものに意義や価値はあったのか/なかったのかを明らかにすることを研究課題とした。研究対象を生活記録に限定したこと及び学習活動に意義があることを前提としない視点に立ったことが変移である。

以上の研究課題を定めた上で、修士論文では生活記録実践の意義等を検討するための前段階として、生活記録文集に質的データ分析を施し、そこにどのような語りが見られるかを客観的に明示することに注力した。

〔佐藤 悠介〕

本年度より修士課程に進学した。学部より引き続き、学校と地域の連携を研究テーマとした。

授業は、本コースのものに加え、学校教育高度化専攻の講義も複数受講し、学校経営や教育行政の視点を得た。卒業論文では学校と地域の連携に関する政策面及び制度面の展開について考察したが、修士論文では、連携による具体的な実践として、地域課題を素材にした学校授業を取り上げる予定である。その準備として、本年度は、先行研究や実際に行われている事例について、文献を通して検討した。

研究室の活動として、8月の東大キッズセミナーにスタッフとして参加した。また、個人的な活動であるが、高校で非常勤講師として勤務し、教師の視点から学校現場を見ることができた。

学位論文

博士論文

2019年12月(課程博士)

山口香苗

「台湾『社区大学』の展開と特質 —市民受講者の実態調査から—」

修士論文

2020年3月

岡本知佳

「戦後生活記録文集の再検討 —1960年代の兵庫における女性の文集『おかあさん』を中心に—」

酒井瑞生

「高齢者の学びと『孤独感』の変容 —なかの生涯大学卒業生の語りから—」

名倉早都季

「国語教育における言葉を使って考えることに関する「説明」の様態 —『理由説明ができる』とはいかなることか —」

渡邊晃一郎

「引用の存在する文の性質についての考察 —引用の対象となる概念の考察を踏まえて—」

姚依辰

“You Always Have a ‘Choice’: A Relevance-theoretic Account of English ‘Nativeness’ by Evidences from Reading Figurative Language (関連性理論から見る英語のネイティブネスについて —修辞の読み理解における「選択」を中心に)”

楊映雪

「高齢者の社会参加とは何か —当事者の語りを通して—」

図書館情報学研究室教員・院生一覧

教授	影浦 峽
准教授	河村 俊太郎
特任助教	宮内 拓也
客員教授	海野 敏
客員研究員	賀沢 秀人 (学環)
博士課程	高橋 恵美子 志村 瑠璃 新井 庭子 (学環) 矢田 竣太郎 朱 心茹 唐 麟源 (学環) 韓 尚珉 陳 龍輝 (学環) 朴 惠 王 一凡
修士課程	名倉 早都季 渡邊 晃一郎 姚 依辰 (学環)
研究生	曾 加 王 東玥 胡 玥

社会教育学・生涯学習論研究室教員・院生一覧

教授	牧野 篤
准教授	李 正連 新藤 浩伸
博士課程	大山 宏 中川 友理絵 杉浦 ちなみ 須藤 誠 松田 弥花 入江 優子 詹 瞻 堀本 暁洋 松尾 有美 大野 公寛 丹田 桂太 末光 翔 野村 一貴 林 忠賢 金 亨善 松本 奈々子 鈴木 繁聡 三木 柚香 板倉 輝
修士課程	岡本 知佳 酒井 瑞生 楊 映雪 佐藤 悠介
研究生	唐 劍明 (2019年10月22日まで) 陸 旻紅 (2019年 8月26日まで) 湯 博文